



大腸がんについて

- ✓ わが国では罹患する人が増加しており、がんによる死亡原因の上位に位置するがんです。
- ✓ 検診を受けることでがんによる死亡リスクが減少します。
- ✓ 検診は毎年定期的に受けてください。ただし、血便、腹痛、便の性状や回数に変化した、などの症状がある場合は次の検診を待たずに医療機関を受診してください。
- ✓ 検診で「要精密検査」となった場合は、その後必ず精密検査を受けてください。
- ✓ 精密検査の第一選択は全大腸内視鏡検査です。
- ✓ 検診では、がんでないのに「要精密検査」と判定される場合や、がんがあるのに見つけれない場合もあります。
- ✓ 検診は自治体と、各医療機関が連携して行っています。精密検査の結果は関係機関で共有されます。*

※精密検査の結果は市区町村へと報告されます。また、最初に受診した医療機関と異なる医療機関で精密検査を受けた場合は、最初に受診した医療機関にも後日精密検査結果が共有されます。(医療機関の検診精度向上のため)

これから受ける検査のこと
大腸がん検診



国立がん研究センターは、皆さまからのご寄付で全国の図書館に信頼できるがんの冊子をお届けするキャンペーンを行っています。ぜひご協力ください。

国立がん研究センターがん情報サービス ganjoho.jp

発行：国立がん研究センターがん対策情報センター
がん医療支援部 検診実施管理支援室 2018年6月
協力：厚生労働行政推進調査事業費補助金「検診効果の最大化に資する職域を加えた新たながん検診精度管理手法に関する研究」班

国立がん研究センター
がん情報サービス ganjoho.jp

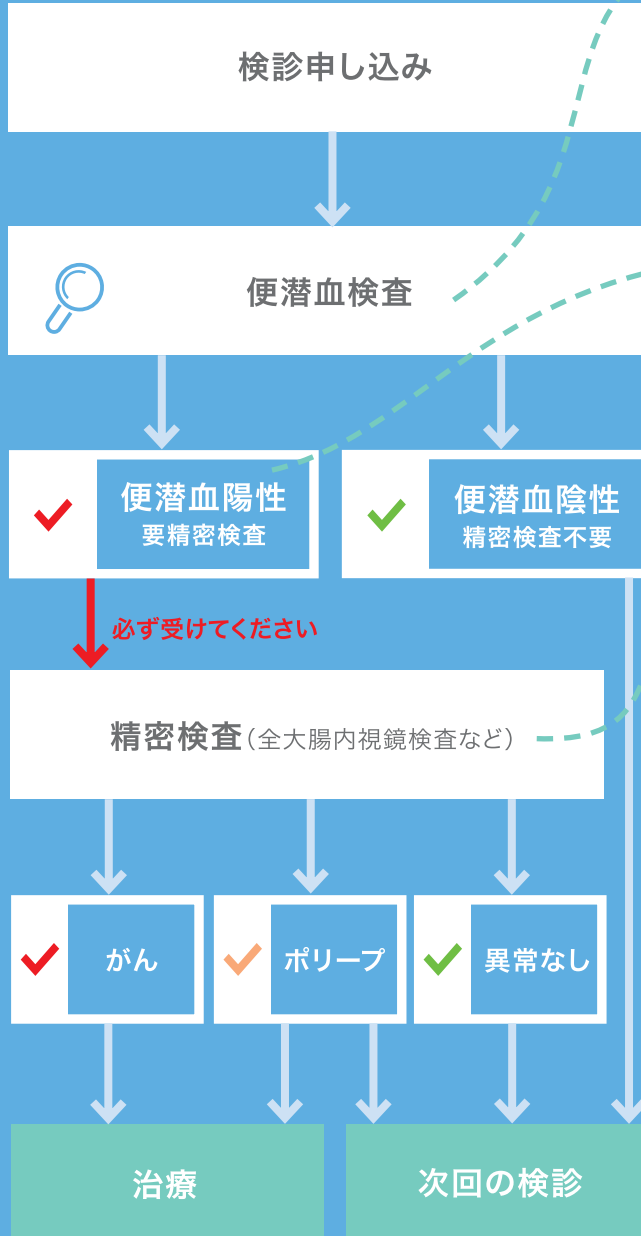
大腸がん検診の流れ

大腸がん検診を受ける前に...

大腸がんは罹患する人(かかる人)が増加しており、わが国のがんによる死亡原因の上位に位置しています。自治体で推奨している大腸がん検診(便潜血検査)は「死亡率を減少させることが科学的に証明された」有効な検診です。早期発見、治療で大切な命を守るために、40歳以上の方は毎年定期的に検診を受診し、「便潜血陽性」という結果を受け取った場合には必ず精密検査を受けるようにしてください。

すべての検診には「デメリット」があります。がんは発生してから一定の大きさになるまでは発見できませんし、検査では見つけにくいがんもありますので、すべてのがんががん検診で見つかるわけではありません。また、がんでなくても「要精検」と判定されることもあります。

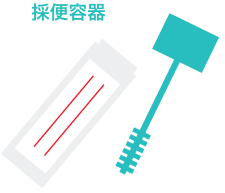
しかし、大腸がん検診はこれらの低い確率で起こるデメリットよりも、がんで亡くなることを防ぐメリットが大きいことが証明されているため、必ず定期的に受診してください。



ポリープが見つかった時には状態(大きさや、形態)によって治療を行う場合もありますし、微小ポリープなど、治療をせずに次回の検診に進む場合もあります。

便潜血検査

便に混じった血液を検出する検査です。ご家庭で2日分の便を採取します。がんやポリープなどの大腸疾患があると大腸内に出血することがあり、その血液を検出することが目的です。(通常は微量で、目には見えません)



便潜血検査で「要精密検査」の結果なら必ず精密検査を受診

大腸がんがあっても症状が出ないことはよくあります。「症状がないから大丈夫」などと自己判断せず、必ず精密検査を受けてください。また便潜血検査が毎回陽性になるわけではないので、もう一度便潜血検査をするのは良くありません。一度陽性の反応が出たら、必ず精密検査を受けてください。

精密検査の第一選択は全大腸内視鏡検査

全大腸内視鏡検査

下剤で大腸を空にした後に、肛門から内視鏡を挿入して大腸を撮影し、がんやポリープなどがいないか調べます。必要に応じて組織を採取し悪性かどうか診断します。大腸の奥まで観察することが困難な場合もあり、その場合は他の検査方法が用いられることがあります。



内視鏡検査と大腸のX線検査の併用法

大腸全体を内視鏡で観察することが困難な場合には、内視鏡が届かない奥の大腸をX線検査で調べます。大腸のX線検査は、下剤で大腸を空にした後に、肛門からバリウムを注入し、空気で大腸をふくらませて大腸全体のX線写真を色々な方面から撮影する検査です。

検診は40歳以上、毎年定期的に受けることが大切です

大腸がんの中には急速に進行するがんもあります。早期発見のために必ず毎年、定期的に検診を受けてください。血便、腹痛、便の性状や回数が変化した、などの症状が続く場合には次の検診を待たずに医療機関を受診してください。